関東連盟所属全チームがポニーフェスタで

1237人肘検診

約3割に負傷警戒も古島氏 他と比べて「非常に少ない」

練習時間、強度、内容など協会推奨スタイル提案

「障がいは予防できる」「野球を変えず選手守りたい」

日本ポニーベースボール協会は5月1日、千葉・柏の葉球場でポニーフェスタを開催。球場でのイベントの前に、関東連盟所属全チームの選手計1237人が肘の検診を受けた。これほど大規模の検診は、中学硬式野球界では例がない。他に比べると、今回の結果は障がいの発生は非常に少なかった。同協会理事であり今回の検診を担当した整形外科医・古島弘三医師、同協会・那須勇元事務総長に、検査結果の検証と今後の方針について聞いた。

20年シーズンから投球数制限

日本ポニーベースボール協会が掲げる理念の1つに「障がいは予防できる」がある。同協会はこの理念のもと、他団体に先駆けて投手の投球数制限を導入するなど、選手たちの障がい予防に力を入れてきた。ポニーフェスタでの肘の検診は3年ほど前から計画していたが、昨年、一昨年はコロナ禍の影響で開催できず、今回の実現に至った。古島理事を中心に4人の医師、8人の理学療法士が検診を担当。関東連盟所属の全チーム、計1237人が肘の検診を受けた。

肘のエコー検査では63人に離断性骨軟骨炎（OCD）の症状が見られた（既往、治療中を含む）。OCDは、小さい頃からの投げ過ぎが原因で関節の中に軟骨がはがれ落ちてしまう障がい。悪化すると肘の伸びや曲がりが悪くなることがある。野球をやっている小中学生の2～5%に見つかる障がいで、特に投手、捕手に多い。

負傷を警戒したい肘の内側形態異常が見つかったのは408人（32・9%）。古島理事は「3年ほど前に学童野球の全国大会で小学校5、6年生を対象に肘の検診を行ったところ、投手と捕手を兼任している選手の60%に肘の内側形態異常が見つかりました。それに比べれば非常に少ない数字です」と説明する。投手の投球はもちろんのこと、捕手から投手への返球や二塁送球は、肩や肘に大きな負担がかかる。ポニーは投手の同日の試合での連投、同日の試合での投手と捕手の兼務を禁止している。

1237人の選手の肘のエコー検査を行った

検診の際に行ったアンケートの結果によると、中学生になってから肘に痛みを感じるようになった選手が92人。10%弱という低い数字だ。練習量が多くなれば障がいは当然増える。練習を極端に減らせば障がいも減るが、選手たちは、野球が好きで、うまくなりたい、強くなりたいという思いで練習に取り組んでいる。

古島理事は「練習時間や強度、内容など、より合理的なものを協会からの推奨スタイルとして指導者の方々に提案することを考えています。また、今後は関東だけでなく各地で検診の体制を整えていきたい」と今後の展望について話す。

ポニーが投手の球数制限などを導入したのは20年シーズンから。今年で3シーズン目になる。この3年間の取り組みが、選手たちの障がいの少なさにつながっていると考えられる。那須事務総長も「今回の結果はまだ第1歩。来年以降もこの検診を継続し、結果を検証しながら、さらなる施策を考えていきます。野球を変えずに選手たちを守りたいですね」と力強い口調で語った。

◆古島弘三（ふるしま・こうぞう）1970年生まれ。国立弘前大医学部卒。医学博士、慶友整形外科病院（群馬・館林市）整形外科部長、慶友スポーツ医学センター長、慶友胸郭出口症候群センター長、日本整形外科学会専門医、日整会認定スポーツ医、日本スポーツ協会スポーツドクター。国内におけるトミー・ジョン手術の第一人者。2019年に館林慶友ポニーを立ち上げ、代表を務める。21年に日本ポニーベースボール協会常務理事就任。

ポニー江東L 連覇

グランドチャンピオンシップ トーナメント関東地区予選

江東ライオンズ
キリンビバレッジ カップ
優勝した江東ライオンズは昨年につづき本大会に挑む

羽田アンビシャス
キリンビバレッジ カップ
準優勝した羽田アンビシャスも本大会に進む

羽田A◀とともに9月本大会へ

◇6月12日◇千葉・市原能満グラウンド◇決勝

27チームによるトーナメント大会。決勝戦を控え小雨の中、市原ポニーの懸命なグラウンド整備のかいあってプレーボールには雨がやんだ。試合は、ポニー江東ライオンズが13－6で羽田アンビシャスポニーを下し、2年連続2度目の優勝を飾った。3回裏、伊藤心（3年）が逆転の3点本塁打を放ち、押し切った。両チームは9月17日から開催予定の本大会（和歌山市）に出場する。

▽決勝

羽田Aポニー	0400020	6
ポニー江東L	303250X	13

【羽】中村、鷹野、宮本、西村－鈴木冬　【江】横山、宮内、三田、今野、谷津－伊藤　本伊藤（江）　二鈴木冬、宮本、田中、倉田（羽）伊藤（江）

伊藤が逆転3ラン「狙っていました」

3回裏、3－4と1点を追う江東は、1死一、三塁の好機。打席には5番伊藤が入った。内角直球を振り抜くと打球は、左中間フェンスを越えた。「狙っていました。打った瞬間、入ると思った。思わずガッツポーズが出そうになりました」と笑顔で振り返った。第1打席の2点中前適時打で乗った。2打席目が逆転本塁打、5回の第4打席は走者一掃の左中間二塁打で計8打点の活躍だった。伊藤は正捕手として今大会マスクをかぶった。「久々の捕手だったので緊張しました」。自慢の肩で、盗塁を刺すのが楽しいという。最優秀選手に選ばれた9番二塁の加藤聖季（3年）は「名前を呼ばれてビックリ。今日の守備と準決勝の3安打が評価されたのかな…」。田本剛監督（33）は「大会でチームは走攻守とも成長してくれた。全国の舞台でも優勝を目指します」と意気込みを見せた。

羽田A先発に誤算 降板早く継投影響

羽田の武島信幸監督（55）は「打ち勝たなければ勝利はないと思っていたが、投げるほうでの先発中村（謙太、3年）の降板が早すぎました」。先発の誤算が2番手以降のリレーにも響いた。5回を終わって9点差をつけられたが、6回表、田中智大（3年）の適時二塁打などで2点をかえした。大会優秀選手の捕手鈴木冬弥（2年）は、「江東の選手は芯に当てるのがうまかった。（逆転本塁打は）僕のリードミスです」と悔やんだ。

◆表彰選手 【最優秀選手賞】加藤聖季（ポニー江東L）【優秀選手賞】鈴木冬弥（羽田Aポニー）【殊勲賞】岸本尚武（ポニー江東L）、西村貫汰（羽田Aポニー）